昭和三十年における国語学界の展望（承前）

三、国語学一般（総記・語法）

吉沢典男

昨三十年一月から十二月までの国語学界全般の展望のうち、国語史・国語学史、方言、国語問題、国語教育に関するものを除いて「国語学一般」とし、その内容を「音韻、文字、語彙、意味、語法、及びその他（総記）」に分けた。本欄では、総記、語法の二つを取扱う。以下、単行本は『』で、論文などは「」で示した。

昭和十九年三月に成立して以来、十周年を迎えた昨三十年に、国語学会はいくつかの記念行事を行ったが、その一環の中でも、とくに斯界から注目されていた『国語学辞典』の編集が完了し、本年八月にはその刊行をみた。

執筆者百八十余名を動員し、国語学のみならず〈広い視野に立って、言語生活・国語教育・国語問題等にも問題を求め、言語学一般、その他、隣接諸科学の項目を収めて、専門学者に益すると同時に、広く一般人に斯学の扉を開くことを期した〉（同辞典、刊行のことば）というこの辞典は、総ページ千二百五十余、堂々たる大著となって世に出た。二千二百七十項目の他に付録として「国文法諸説対照表」「国語活用表」「国語年表」「国語関係参考文献一覧」などが添えられている。恰好の入門手引書として、一般の人々からも好評をもって迎えられたことは、いくつかの書評に見えた通りであった。たまたま気付いたこととして、「音声生理学」が項目中にありながら、「音声言語医学」ないし「言語医学」といわれるところの項目がなく、隣接諸科学の取入れ方に不徹底があり、われわれ素人にも絶好の入門書である『言語障碍の診断と治療』『発声障碍の診断と治療』（共に鈴木篤郎氏著）などが紹介されなかったのは惜しまれる。

ともあれ、現代の国語研究についての、解説的総決算として、学史上に輝かしい記念塔が打建られたことは、国語学界が世に誇っていいことであろう。

国語研究所編の『国語年鑑（昭和三十年度版）』も、七月には刊行（秀英出版）され、昨年度に続き、年間の「ことば」についての動向を収録している。個人ではできにくい、この種の仕事が毎年続けられることの意義は、今更論ずるまでもないことであろう。

なお、『明治以降国語学関係刊行書目』も同研究所資料集4として刊行され（六月）、約三千冊が収録されている。従来の同種文献（たとえば、山田房一氏編「言語関係刊行書目」など入手困難なものが多い）を集大成し、整理追加した点で便利である。

今年は、多くの単行本が前にも増して刊行されたことを忘れて

はならない。

土井忠生氏『ロドリゲス日本大文典』（三省堂・三月）、有坂秀世氏『上代音韻攷』（三省堂・七月）、土居光知氏『日本語音声の実験的研究』（岩波書店・三月）、江湖山恒明氏『国語表現論』（牧書店・七月）、飯田利行氏『日本に残存せる中国近世音の研究』（飯田利行博士著作刊行会・十一月）、時枝誠記氏『徒然草総索引』（岩波書店・八月）などは、文部省の刊行補助金による刊行である。（これは、われわれにとっては、大変よろこばしいことであると同時に、現時、専門学術書の刊行のむつかしさをも示していよう。）また、時枝誠記氏『国語学原論 続篇』（岩波書店・六月）、石垣謙二氏『助詞の歴史的研究』（岩波書店・六月）、市河三喜・服部四郎氏篇『世界言語概説 下巻』（研究社・五月）、三上章氏『現代語法新書』（刀江書院・五月）、『折口信夫全集19 国語学篇』（中央公論社・二月）『万葉集大成 言語篇』（平凡社・四月）、国語研究所報告8『談話語の実態』、大久保忠利氏『コトバの生理と文法論』（春秋社・四月）、佐久間鼎氏『日本語のかなめ』（刀江書院・十月）、小島好治氏『国語学史 現代篇』（鎌倉印刷出版部・八月）などが出た。これらについては、それぞれ関係のところでふれられるであろうが、いずれも、研究として、あるいは、資料として、学界に寄与するところ多いであろう。なお、復刊に『室町時代言語の研究』（風間書房・八月）があった。

「国語学」は、文字論（第二十輯）、古代語から近代語へ（第二十二輯）などの特輯をした他、毎号新見に富んだ論攷を収載した。とくに、第二十二輯古代語から近代語へ（九月刊）は、同題の研究発表会（京都・第八回）をもととして、特輯されたものであり、一つの共同課題を、それぞれの研究者が分担して追求するという点で注目された。実質的な共同研究というにはまだ遠いが、方法論としてみるとき、今後の発展が期待される。

『談話語の実態』も、そういう意味で国語研究所における共同研究の一つとして、いろいろ評価されている。近時、たとえば方言研究などは、社会学・心理学・統計学との緊密な協力、あるいは共同調査という巨視的な立場をとっている、国語研究所地方言語研究室をモメントとして進んでいるが、十一月に国語研究所が研究発表会を兼ねて開いた〈地方調査員全国協議会〉の席上、全国言語地図作製の話のときに、ある調査員が〈近ごろ、社会学だ統計学だと、どうもわれわれ個人には、近ずきにくいむつかしい方法によって、成果が挙げられており、とてもついてゆけないという不安を感じているが、こういう語彙の調査ならば、われわれも大いに張切ってやれるという自信が持てる〉といった趣旨の注目すべき発言があった。共同研究にしろ、個人研究にしろ、いわゆる方法論についての問題が、これからの国語学発展のために、大いに論じられ、考えられてよいと思う。

さて、国語学と直接関係はないが、アメリカの Remedical Education の流れを汲むものとして、平井昌夫氏を中心とする〈治療教育研究会〉が発足し、「研究集録（1～4）」を出しているが、これは、先にもふれた〈言語医学〉的な立場や方法を導入している点で注目すべきであろう。医学畑にあっては、〈音声言語医学・言語医学〉などの術語が示す通り、医師による発声や言語障碍についての研究があるが、とくに近年、口腔外科・耳鼻咽喉科の人たちによる研究は進んでおり、颯田琴次・林義雄・鈴木

篤郎氏等を中心として〈言語医学会〉結成の動きもあるという。隣接科学の一つとしてその成行が注目されよう。

また、西下経一・山口武氏等を中心に〈解釈学会〉が発足（五月）し、「解釈」を毎月出している。これは往年の橘純一氏流の行き方を目指している。

なお、昨年十月、神田一ッ橋の新庁舎へ移転した国立国語研究所は、三月に〈新庁舎開き記念講演会〉を行い、「言語生活」（四月号）では〈国語研究所は何をしてきたか〉の特集を行なった。次に個々の研究の成果について見よう。

(一) **言語・国語総記**　まず、『世界言語概説 下巻』の刊行を銘記しなくてはならないだろう。三年前に出た、上巻が西欧語についてであるのに対し、この下巻は、日本語・朝鮮語・蒙古語・トルコ語・シャム語・安南語・チベット語等、アジア諸地域の言語が、それぞれ専門の言語学者によって説かれている。全千三百二十九ページ、編集者と執筆者の熱意と努力によって完成されたこの書は、アジア諸地域の言語研究を、他の国の言語学者が殆んど手がけていないだけに、わが国言語学界の水準を示すものとして、注目される。

中で、服部四郎氏「解説」には、言語研究の方法の発達や反省、Morris Swadesh に始まる言語年代学の紹介説明などがあり、解説というよりは高度の論文である。「日本語」は、次のような、分担執筆である。

分布・文法・方言——金田一春彦氏　音韻——服部氏　語彙・文字——林　大氏　歴史・系統——大野晋氏

服部博士は、従来しばしば新知見を提出されて学界の指導的位置にあられるが、この「日本語」および「琉球語」には、自ら執筆者として、また監修者として、ともすれば高尚難解とされる、博士の学説が実際例の処理として具体的に示されていることは、われわれにとって、嬉しいことである。

他に言語学関係では、**A・J**エイヤー『言語・真理・論理』（吉田夏彦訳、岩波現代叢書・二月）エルミーロフ他『スターリン言語学と文学芸術論』（山田広行訳、未来社・五月）などがあった。『言語・真理・論理』は、形式論理や一般意味論の指導書として、広く読まれるべき問題を含んでいる。

金田一京助氏『言語学五十年』（宝文館・五月）は、語源論・標準語論・国語改革など、かつて諸種の雑誌に発表したものを部門別に収録したものである。

駿台社編集部編『文風運動の原則的諸問題——日本語を守るために』（駿台社・三月）は、労働と言語の発達（エンゲルス）、言語と思想（マルクス）、母語について（スターリン）などと共に、毛沢東魯迅・芋盾など三十一の論文が収められ、いわゆる文風運動の立場と主張をみるのに便利である。

なお、**L・R**・パーマー『現代言語学紹介』（神保・渡辺・佐藤共訳、泰文堂・三月）が出た。

系統論に関しては、福田良輔氏に二つの論文があった。「古代日本語の成立過程—弥生式文化を土台とする社会変革との連関において」（国語学・第二十一輯）では、日本語が弥生式文化を持ち新しく西部日本に渡来して来た民族の言語で、それが全国に拡がったものとし古代日本国家と共に共通語としての古代日本語が成立し、また古代東国方言の中に差異あることなどを概論ふうに論じられた。

もう一つは、「奈良時代東国方言の周辺――言語基層・八丈島方言・補説――」（『文学研究第53輯・十二月』）である。福田氏が発表を続けておられる一連の古代東国方言の成立に関する論文についての後藤興善・金田一京助・亀井孝氏らの反対論や批判に対して、詳細な反駁を開陳し、〈遺伝的形質〉としての日本人の指紋の分布の調査の結果を引用されたりして、〈指紋の、蹄状紋と渦状紋との分布比率の東西境界線は、また奈良時代東国方言と古代西部日本語との境界線であり、かつ、その境界線は今日まで受け継がれて、本州東部方言と本州西部方言との境界線となっている〉ことなどを述べて、自説を補っておられる。なお、氏に「東歌の成立」（『万葉集大成〔言語篇〕』所収）の論もある。他に、大野晋氏「系統」（前述『世界言語概説』のうち「日本語」に所収）がある。

次に、時枝誠記氏『国語学原論 続篇――言語過程説の成立とその展開――』（岩波書店・六月）をみよう。〈言語を、それと関連する人間行為全体から切離して、専ら言語自体の構造を抽象的に観察したに止まった〉『正篇』（この続篇に対し前著『国語学原論』をさす）に対し、この続篇は、〈言語を、街頭における、また、生活における機能において把捉し〉正篇の〈発展的な諸問題を扱うと同時に、言語過程説の理論に基く、独自の国語学の体系的記述を企図したもの〉と、氏は言われる。主として昭和二十年十月以後、東大での「国語概説」の題目によって継続して行ってきた講義に於て追求された問題であるという。〝言語による思想の伝達・言語の機能・言語と文学・言語と生活・言語と社会及び言語の社会性・言語史を形式するもの〟の各論の他、初めに〝総論〟として、正篇から続篇への発展・言語過程説における言語研究の方法などが述べられており、自ら〈元来、音韻・文法・語彙の三大部門は、言語の系統的歴史的事実を実証するためにとられた基準であったのであるが、それがいつしか、言語の体系的記述の枠のように考えられるに至って、言語観察の観点は、著しく狭められ、かつ、固定してしまった。言語研究の鉄則の如くに考えられて来た、この三大部門を、破棄し、脱却するところに新しい国語学の体系が樹立されるものであることを、私は確信するようになった〉と言われているが、そういう視点や方法・態度が随所に見られる。たとえば筆者個人の興味から読んでみても、〝第六章言語史を形成するもの〟は、かつて国語と国文学に発表された、ラングだけでは国語史は編めないとする〈国語史研究の一構想〉をさらに発展整理、体系化されたもので、そこに、時枝博士独自の方法と態度を知ることができる。言語過程説が抽象論をはなれて、具体的な問題と取組んでおり、ここに、『日本文法 口語篇・文語篇』などとともに、博士独自の体系が、いよいよ明確化したわけである。正篇と同じく、いろいろと批判も沢山出されることであろう。

佐久間鼎氏『日本語のかなめ――音韻と語法の法則――』（刀江書院・十月）は、かつて出された『日本語の特質』『日本語の本領とその改善の方途』などを発展させた、ユニークな現代語研究の著。〝吸着語〟〝品さだめ文〟など独特の一家言に富んでいる。

樺島忠夫氏「言語活動における対人関係」（『国語国文・八月』）は、〈対人関係の場面を考える場合、いかなる種類の人（聞手とか第三者とか）が存存するかについてだけでなく、聞手や話題の人が定められる以前に存在する心理的関係からとらえなければな

らない〉ことを、実例に即して図式化している。

言語生活の分野を、次に主なものについてみよう。

「言語生活」は、毎月次のように特集を行なっている。言文一致は可能か(1)　東京語はひろがる(2)　子どもの言葉(3)　国語研究所は何をしてきたか(4)　詩的表現と日本語(5)　科学と日本語(6)　片かなと平がな(7)　ラジオ放送はこれでよいか(8)　中国の国字問題(9)　戦後作家の文章(10)　漫画とことば(11)　これからの書簡文(12)

10月号からは、八十ページだてにふえ、読者数も、月月ふえつつあるという。

〈日本話術ロータリー〉は機関誌として「ことば」を創刊（十一月）した。「言語生活」をカミシモ姿とすれば、こちらは、ゆかたがけの雑誌にする——という。多分に実用的な面をねらっているようである。

NHKのことばの研究室も、前に続いて文字化され、『ことばの研究室Ⅴあすの日本語』（四月）、『言葉の魔術（同上Ⅵ）』（九月）（ともに講談社）の二冊が出た。Ⅴの中の「百年後の日本語（座談会）」など、いくつか話題になった。

「講座日本語」（大月書店）として、金田一春彦氏編『日本語の種々相』（十一月）、上甲幹一氏篇『日本人の言語生活』（十一月）中村通夫氏編『日本語の構造』（十二月）（以後、続刊）が出たが何れも予想外の反響があって、編集部を驚かしたという。

他にも、「話しことば新書」（光風出版）として平井昌夫氏「話しことばの機能」『話しことばの実用』の二冊がある。（以下続刊）

西尾実氏編『日本語さまざま』（筑摩書房・七月）同『言葉と生活』（毎日ライブラリー・十一月）、岩淵悦太郎氏編『ことばの現代風景』（筑摩書房・十二月）も出た。

『日本語さまざま』は、「言語生活」にのった、随筆二十八編を再録したもの。『ことばの現代風景』は、同じく「言語生活」のロクオンキ棚にのったものから選ばれて再録されたもので、恰好の世相バックミラーというところ。『言葉と生活』は、科学とことば（湯川秀樹氏）演劇とことば（木下順二氏）など八編を収めているが、文化とことば（金田一春彦氏）は、さしずめ、日本語版〝菊と刀〟というところで、話題になった。

いわゆる言語技術では、山名正太郎氏『話しの運び方』（創元社・三月）、中岡季正氏『話し言葉——その理論と技術——』（愛隆堂・六月）、平井昌夫・中村裕子氏『スマートな話し方』（ひまわり社・十二月）など応接にイトマのないほど、実に多くの本が出ている。

《ことばブーム》と言われたり、《言語生活学派》あるいは《言語技術学派》と、戯称したり、されたりもする学者が出てきたのも、ムベなるかなというところであろう。

なお池上禎造氏に「上代人の言語生活」（『万葉集大成（言語篇）』所収）がある。イフ・キクなどの語を検討し、上代人の言語意識を広範囲かつ体系的に考察したもので、かつて発表された「言語生活の一意義」（国語国文・三十年四月）に続くものであろう。

今まで、部外公開されたことのなかった、NHKの『アナウンス読本』も、新訂されて刊行された。（日本放送出版協会・三月）

福田清人氏『文章のつくり方』（同和春秋社・四月）、川端康成氏他編『文章講座実用文の理論と方法』（河出書房・三月）、片桐

顕智氏『新しい手紙の書き方』（春秋社・四月）など、実用的な文章についての本も出ている。

マスコミュニケーション（以下、マ・と略記）に関しては、河出書房のマ・講座が、前年に続いて清水幾多郎氏編『マ・の原理』（マ・講座Ⅰ・五月）同『マ・と政治・経済』（Ⅱ・五月）、城戸又一氏編『新聞・雑誌・出版』（Ⅲ・九月）、清水・城戸・南村・日高六郎氏編『現代社会とマ・』（Ⅴ・二月）、二十世紀研究所編『マ・事典』（Ⅵ・二月）と刊行された。新聞については、小山栄三氏『新聞学入門』（同文館・四月）などの「新聞の知識シリーズ」（1～11）、K・マーテイン『新聞と大衆』（島田巽訳、岩波・七月）千葉雄次郎氏『新聞』（有斐閣・八月）など目立って多く出版されている。

放送については、近藤春雄氏『放送文化――ラジオとマ・――』（八月・新評論社）NHK放送文化研究所「放送が児童の言語に与える影響」（三月）などがある。また、ラジオ東京調査局用語班編『商業放送用語研究――誤謬の実際例』（八月）や、文化放送調査部編「月刊放送用語研究誌」なども出されており、民間放送に於てもNHKの用語委員会に似た仕事に乗出していることがうかがえる。マ・に関する論文も多いが。ここでは一々述べない。

文体については、「言語生活」（十月）に〈戦後作家の文章〉の分析があった。大岡昇平（宮地裕氏）、椎名麟三（長谷川泉氏）、堀田善衛（寺島愛氏）、安部公房（市川孝氏）、曾野綾子（金岡孝氏）がそれで、同時にそれぞれの作家に〈わが文章〉を語らせているものも、おもしろかった。その他森修氏「西鶴の文体の時代的意義」（国語国文・三月）、西尾光雄氏「古事記の文章」（国語と国文学五月）、小島憲之氏「日本書紀の文章」（国語国文・五月）、児玉玲子氏「源氏物語の文章」――歌と地の文及び詞のと文との関係を中心として――」（女子大国文二号・七月）、川端善明氏「説話物語集の文体――言語態度と表現意図と――」（国語国文・九月）、小林茂大氏「二葉亭四迷の言文一致体とその影響」（山口大教育学部研究論叢、五の一）景山直治氏「廣美人草の修辞についての研究」（明治大人文科研究所紀要3・三月）などがあり、「解釈と鑑賞」六月号は、〈古典の修辞法〉を十八氏の論によって、特集した。

(二) **文法**　文法での話題は、(1)『現代語法新説』『コトバの生理と文法論』『助詞の歴史的研究』など単行本の出たこと、(2)**ナリ論争**が見られたこと、(3)ここ二三年来の大きな流れとしての**文研究**が見られたこと――などであろうか。

(1) 三上章『現代語法新説』は、前に出た『現代語法序説』に寄せられた斬新な着想にみちているために、かえって全体が体系をなしていないのではないか――という批判に応えるべく、著者独自の文法論を展開している。**副**・敬語・構文の三篇からなり、四百ページ余のいたるところに示唆に富んだ着想がみられ、とくに、センテンスの内部、センテンスの前後など、著者のシンタクス研究は一段と整理発展していて、今後の文論研究に与える影響も大きいことであろう。本の初めに各章のレジュメが要領よく載せられているものも、三上文法を理解するのに一層便利である。この書を得たことを、文法学のために大いに祝福したいと思うのは、私だけであろうか。

大久保忠利氏『コトバの生理と文法論』は、『コトバの魔術と思考』『コトバの心理と技術』と共に、氏の三部作の一つである。

第一部街の言語学・第二部国語教育の七つの発言・第三部論理学文法論ノートの三部からなっており、それぞれ氏独特の立場に立った見解で、いわば社会の中でのコトバの使い方についての鋭い考察がみられる。とくに、第三部は、日本文法の統一と確立のために——という副題の示している通り、形式論理から出発して、山田孝雄氏説や言語過程説を批判して、「これからの日本文法」の構想を展開しており、それにプラグマティックな匂いを強く感じはするが、全編にみなぎる氏の国語愛は読者を動かすことであろう。なお、第一部には、時枝氏の「ソシュール批判」を再検討する——の一章もある。

『助詞の歴史的研究』については、他の項目担当者が詳述することだから、ここには省く。なお、亀井孝氏「概説文語文法」（吉川弘文館・四月）が、〈教育文法〉を目指して出た。

(2) いわゆる「ナリ論争」とは、伝聞推定とされる、終止形接続の助動詞ナリをめぐって、いくつかの疑問、批判や支持論が提出されたことである。

このナリ論争の端初は、遠藤嘉基氏が「国語国文」に連載されている「新講和泉式部物語」の㈦（二月）に、〈伝聞推定に疑問をいだくようになった〉事情を述べられ、〈伝聞推定説なるものは表現の意味と素材の意味とを混同しているのではないか〉と批判されたことにある。

この点について、「国語国文」に投稿が集まり、同誌七月号には、竹岡正夫氏「いわゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義」、原田芳起氏「伝聞推定の「ナリ」」、木之下正雄氏「指定のナリの相違点」が載り、遠藤氏も「新講和泉式部物語(九)」を「伝聞推定の「なり」について(承前)」として書かれた。遠藤氏は、なお「いわゆる伝聞推定の「なり」について」（万葉研究第八号・五月）をも書かれ、〈上代に見える終止形接続のナリは断定の咏嘆と綜合表現とみてよいようである〉とされている。さらに、春日和男氏は「いはゆる伝聞・推定の助動詞「なり」の原形について」（国語学・第二十三輯）を書かれた。

竹岡氏は、伝聞・推定では解釈しにくく、また、解釈してもムリな感じを伴う例があること、「音す・声す・いふ」などのことばが上に用いられているのに更に伝聞をつけ加える必要はないだろう、などの理由から帰納的にナリの意味については、江戸時代の学者の所説が正しいと説き、実例にそって解釈をすすめ、ナリの本義は〈話手（作者）の、対象のあり方に関する客観的論理、或は表現上の論理ではなく、対象に対する話手（作者）自身の意識のしかた、見方、感じ方、考え方そのもの、姿勢・態度そのものが具体的に表現されている〉とされている。原田氏は記紀万葉のナリ、平安期のナリなどを考察し、宣長説を支持し、伝聞推定説を満足させる用例は平安期の散文にあるが、伝聞推定は、〃様態〃の中に特殊に表われた例で、その中に包含されていたとみるべきだと説かれる。以上遠藤・竹岡・原田三氏は伝聞推定に異見を持つ立場であるが、木下・春日氏は、これを肯定する立場にある。木之下氏は、〈指定ナリと推定ナリは意味・文法上の機能・アクセントを異にして、その相違は相当大きいと言えよう〉ということを、多くの角度から説いたものである。春日氏は、伝聞推定に同意する立場にある諸家、異見を持つ立場の諸家を整理することから出発し、〈伝聞推定のナリは音響又は音声表現に限って

用いられること、万葉集における借訓仮名が異なること、伝聞推定のナリに「に」と「あり」に分解された形を持たないこと、ナリが終止形を承接する理由の考察などから松尾博士の提唱は一往正しいと思うとされている。

まだまだ、このナリ論争は続けられる気配がある。国語学会に於ても、最近「ナリ」をめぐっての討論が企図されたこともあったと聞いている。

(3) 文研究の面で注目すべきものは、国語研究所報告8「談話語の実態」の中にみられる、「文・文節・語の長さ」「文の構造」の二章にわたってみられたものであろう。文内部の成分の組合せなど、構造的考察であるが、今までやられていなかった調査研究だけにその意味は少なくない。

田辺正男氏「謂はゆる対等の関係にある文節に就いて」(国語研究――国学院大学国語研究会――三号・七月)は、対等の関係にある文節には択一・個別・合体・対等的合成などの結合のしかたがあることを論ずる。氏独自の文論研究の一環として注目される。他にも次のような論文がある。長田久男氏「文末の構造とその類型」(立命館文学一二〇号)は、表現者の意志、技巧意識・待遇意識によって文末の諸類型(主に助詞・助動詞)を立てたもの。北山正迪氏「助動詞考察のための「文」試論」(国語国文・七月)は、文論について見解を述べ、言語主体や過程のうち「文」論を定義しようとしておられる。抽象的哲学的考察である。進藤正邦氏「「場」による「文」の分類について」(山口女子短大研究報告第三号)は、話者の意向が「場」に依存するか否かを根本基準として文を六分類したもの。前述、三上・大久保氏、ともに「文」を問題にされていることは改めていうまでもないことであろう。三上氏には「名詞文の拡張」(国語と国文学・二月)の論もある。その他、活字にはなっていなくとも、大勢として、文研究の方向に眼が向けられていることを何かにつけて、感じさせられる。

なお、泉井久之助氏「語順の原理」(国語国文・八月)は、語順の起原を言語の線条性に置き、語順はすべて習慣的な顕現であるけれども、線条のはじめに立つものは、すべて「表現の主語」であるとして、問(疑項)と答(説明)との間に、定義的・相関的・描写的・定義描写相関的(中性的)・発動関係の五つの関係を分析される。この関係の表現(助詞「は・が・を・も」)を現在「顕在的に有形的にみとめることができるのは日本語だけである」と言われている。文論研究に多くの示唆を与える、原理的発言であろう。

(4) **その他** 各分野につき、主なものを挙げてみよう。

品詞の分類その他については、次のようなものがあった。中西宇一氏「不定詞の分類」(国語国文・十二月)、森重敏氏「接続助詞の分類」(国語国文・二月)、樺島忠夫氏「類別した品詞の比率に見られる規則性」(国語国文・六月)、水谷静夫氏「同じ語か違う語かを統計的に見分ける方法」(国語学会研究発表会・十一月)。中西氏は、「どの・どちらの・なに・どう」などの不定詞を内容表現との関研で、分類表を示されたもの。森重氏は氏の独自の心理主義的の助詞係究の一環として、接続助詞の分類に考察を加えられたもの。なお、氏には、これと関連して「接続助詞の句格」(国語国文・三月)、「接続副詞における助詞性副詞の成立」(国語国文・七月)もある。樺島氏は〈①名詞②動詞③形容詞、

形容動詞、連体詞、副詞④接続詞、感動詞の四つのグループに分けてみた場合、条件が一定であると考えられる文の集合をとってそれぞれの百分率を計ると、これらの間には、一定の規則的関係があるとして、これを数式的に示されている。水谷氏は、語彙調査にとって大切な課題である、同じ語か違う語かを判定するという問題に対し、統計理論にいうところの〈線型判別函数〉を利用して四つの基準から数量化した数値によってこれを判定する方法を述べ、この方法が、〈専門家判定〉との一致率（成功率）が九四%であることを述べられた。新知見というべきであろう。西尾孝氏「品詞を検討して文法体系の再建に及ぶ」（学術研究第四号）の論もあった。

品詞各説についてみよう。森重敏氏「接続副詞における助詞性副詞の成立」（国語国文・七月）は、いわゆる「接続詞」は厳密には接続副詞で、しかも助詞性を含む副詞であるとし、古代語の諸文体・現代語を引用して論じたもの。吉川泰雄氏「接続助詞「から」と慣用語「からは」」（国語研究——国学院大学国語研究会 三号・七月）は、「からには」「上は」に当る「からは」は江戸初期から見え、「か」それは接続助詞「から」とは別で、接続助詞ではないことを多くの実例を挙げて論じたもの。小林芳規氏「訓点語法史における副助詞「ら」について」（国語と国文学・十一月）は、「ら」の消長を漢文訓語資料を基として追求したもの。石垣謙二氏『助詞の歴史的研究』は、氏の発表論文八編を集めて刊行されたもの。われわれ後続の者には、名のみ高かった故石垣氏の実な助詞研究の全貌をうかがうに足る、古典的著作といっても過言ではないところの文献となった。斯林不二彦氏「「浮世床」を通して見たる〃主語提示の助詞「が」と「は」〃」（国語・国文学）試論——武蔵野文学会——・七月）は、「浮世床」の用例を集め、「が」は話手が、聴手の意嚮に関せず主情的に判断するときの対象を示し、「は」は、話手が論理的に述べるときの論理展開の「場」を示す機能を持つとする。青木伶子氏に「「へ」と「に」の消長」（国語学会研究発表会）の、詳細な研究があった。助動詞については橋本四郎氏「ベシ、マジの接続面の混乱」（国語学・第二十二輯）。桜井光昭氏「回想の助動詞の用法」（国語学・第二十三輯）、伊藤慎吾氏「助動詞ッ、文の特殊な用例の研究——有り、待り、給ふなどに接続する用例について——」（滋賀大学芸学部紀要第四号などがあった。何れも、詳細な資料による、着実な研究である。

副詞については、井手至・浜田敦氏「国語副詞の史的研究(2)」（人文研究・六月）が「せめて」「あながちに」「なかなかに」の史的消長を刻明に跡づけられた。武田祐吉氏「副詞「もとな」について」（国語研究——国学院大学国語研究会——三号・七月）は、「もとな」の「な」を「無」でなく感動の助詞だとし「根元な」で心からの感動を表示するものとされる。宮田和一郎氏「禁止・放任の国語」（中古語法覚書一四）（平安文学研究十七輯）は、禁止の「…な」「な…そ（そね・そや・そかし）」「あなかま」「…ものか」、放任の「よし」「よしよし」「さばれ」等の例証を列挙されたもの。

形容詞に関しては、寿岳章子氏「形容詞の語彙的変遷——中古から中世へ——」（国語学・第二十二輯）、山本俊英氏「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」（国語学・第二十三輯）、中川浩文氏「源氏物語の「おほかり」の語法——対話地の文を中心に」（女

子大国文二号・七月）などがあった。寿岳氏のは、語彙論的考察であり、語彙史研究の出発点として注目されるが、方法にまだ問題が残る。梅本堯夫氏らの「形容詞の類似性・熟知性尺度――連想法及び評定尺度による――」（京大教育学部研究紀要第一号）という、心理学的考察もみられた。

動詞については、金田一春彦氏「日本語動詞のテンスとアスペクト」（名古屋大文学論文集X・三月）、風間力三氏「「てゐる」のいひ方」（国語と国文学・三月）、内藤好文氏「現代日本語における《ある》と《いる》の用法」（研究（神戸大文学会）七号・三月）などがあった。金田一氏は〈テンスとは、ある動詞その他の用言の意味する状態・動作・作用がある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるが、同時であるか、以後であるかを示す形態のちがいである。そしてテンスの一つ一つの態は、他の動詞でおおうことができないような意味を有する。アスペクトとは、動詞その他の用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態のちがいである。そして、アスペクトの一つ一つの態は、他の動詞で置き換えることができるような意味を有する〉と結論されている。風間氏は「た」が〈完了したと把握した〉のと比較して「ている」は〈動作を、その動作が行われている状態にあると話手が把握して表現したもの〉とされる。

終りに、敬語についてみよう。相変らず、多くの論文があったが、スペースの点で、主なものだけ限ってみたい。山崎久之氏「国語の待遇表現体系とその歴史」（国語学・第二十一輯）は、室町時代（能狂言の詞章）と元禄期とを比較し、各時代の男性語の待遇表現が、何れも五段階に分類でき、代名詞・動詞・助動詞呼掛の語などが、各段階毎に使い分けられていること、また、室町から元禄に降るに従い、同形の語は敬意が低下する現象を実証し、待遇表現の研究法を論じたものである。龜田定樹氏「敬語の場面的転成とその変遷――所謂「被支配待遇表現」について――」（国語国文）は中古・中世の資料について、「つかはす」「申す」「まかる」など六項目につき、概念相互間の関係のみならず、場面的存在（例えば勅撰集においてそれを受けるべき天皇など）によって制約されることがあると論じている。辻村敏樹氏「敬語の誤りについて」（国語学・第二十一輯）は「雨がお降りになる」「おつりいただきました？」「先生居りますか」など五項目に分け、尊敬語・謙譲語の誤用の現代語の誤用意識を解剖究明したもの。同じく辻村氏には、「現代敬語の一傾向―いわゆる行過ぎについて」（国文学研究十三輯・八月）として、（一）普通以下の対象に向けて用いる場合、（二）過当使用の場合、（三）誇張的な表現の三種に分けて近世の例を引き、その源流と関連させつつ現代の用法を論じたものがある。藤原与一氏「「入らっシャル」などの「シャル」（「～サッシャル」）敬語法について」（国文学攷十四号・五月）は、九州から東北に及ぶ、全国の方言の中で、標記の語法がどのように行われているかを論じられたもの。他に、能勢頼賢氏「上代敬語雑考」（学苑・十一月）、尾崎知光氏「所謂自敬表現について」（名大文学部論文集X・三月）、中岡由行氏「敬語の接尾語「聞ゆ」について」（愛媛国文研究・三月）などがあった。

なお、森重敏氏に「文法史の時代区分」（国語学・第二十二輯）の新論があったこと、田辺正男氏の「文法学説史（入門講座）」

（国語学・第二十三輯）があったこと、さらには、ここでは、一々取上げる余裕はなかったが、雑誌「解釈」に短編ながら、解釈文法について好論文が散見したことを始め、解釈文法にも多くの業績があったことを、附言しておきたい。

―国立国語研究所所員―